

## F-24 学童保育の現状と問題点—学童保育についての総合研究(1)

長崎女子短大 有田敏子 松尾悦子 向井喜代 他6名

目的 婦人労働者の増加、共働き世帯の増加を大きな契機として生れた学童保育所は働く母親の年々の増加に比例して各地で運動が起り、児童に対する役割も益々重要になってきた。そのみならず近年は、一般家庭の児童も交通公害、誘惑魔などのため、家に帰ればマンガやテレビのとりこにならざるを得ない例が多く学童時代の最も思い出となる遊び場さえ失いつつある現状である。この状態を見るにしのびず、すべての児童に安全で幸福なしかも平等な放課後の遊びの拠点を与えたいと、私たちグループは家政学的アプローチからそれぞれの研究にとり組み、学童保育のよりよき発展を願うことを目的として始めたものである。

方法 殆ど無料に近い留守家庭児童会がなぜ発展しないのか、現行の運動場開放に問題ないだろうか、私たちは長崎市内のニヵ所の留守家庭児童会を手がかりとし、当該の学校の全児童、全父兄からアンケートをとり、又それら児童会に席をおく全家庭を訪問調査し、更に全国数ヵ所の児童会の実態調査をも合せ行なって問題点を究明することとした。

結果 保育時間が短い、夏休みがあるので困る、仲良しの他児童と遊べない、学校内にあるので上級生の授業中は思いきり遊べない、大広間一っで全くプライバシーがなく落付かない、家から遠すぎるなど問題点はまだまだ多々ある。学童保育は単に鍵っ子対策だけではない、全児童のためのものである。学童保育を学校教育、家庭教育と異った形の生活集団と考える時、その果すべき役割は広い分野にまたがっている。